
青春短し恋せよ少年！

木立久美子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

青春短し恋せよ少年！

【Nコード】

N9147C

【作者名】

木立久美子

【あらすじ】

「あの、大丈夫ですか？」
「バスに乗り遅れてしまった少年が、ある運命的な出会いをします。」
「めっちゃカワイイ。」

青春短し恋せよ少年！

そんなに俺のことが嫌いですか神様。

「だぁーっもう、ツイてない!!」

これが最近の俺の口癖だ。

曆の上ではとうに秋だというのに、空気はいまだにジメジメと暑苦しい。

街路樹の並ぶ道には眩しい日差しが照りつけ、木漏れ日がゆらゆらと揺れる。

夏の匂いを充分に残す通学路を、俺は全力で駆け抜けた。

学生服のシャツが汗で肌に張り付いて気持ち悪いけど、とてもじゃないが今はそんなこと言ってられない。

なぜなら。

「…ッ…間に合わなかった…!」

遠く彼方へと走り去っていくバスの後ろ姿を見つめて、俺はがくりとアスファルトの上に膝をついた。

ぜいぜいと荒い呼吸。

なりふり構わず全力疾走した甲斐もむなしく、一日4本のバスのうち貴重な午前便を逃してしまった。

次の便は、一時間後。

「だぁーっもう、ツイてない!!」

口に馴染んだ叫びを、人目も構わず言い放つ。

容赦ない晩夏の日差しと、日本特有の蒸し暑さが体を包む。

だからだと流れ、肌を濡らす汗が、非常にうっとうしかった。

最近の俺は、本当に運が悪かった。

なんとなく天気が悪いなと思い傘を持って家を出たら、学校に着くまでにカラリと晴れてしまったり。逆に、ちよつと曇ってるけど大丈夫だろうと見当をつけて傘を持たずに登校すれば、決まって中間地点でザーザー降りになったり。

それだけじゃない。

友達と一緒に行った初詣では俺ひとりが大凶だったし、賽銭箱に五円玉を投げ込もうとすれば、間違えて50円玉を投げてしまうし。(いや、これは単に俺がうっかりしていただけかもしれないけど。だってほら、穴が開いてるところとか、大きさとかも似てるじゃん?)

まあ、とにかくツイてないことばかりなのだ。

今日も今日とて、家を出てから1キロばかり歩いたところで忘れ物に気づき、大急ぎで取りに帰った。もちろん全力疾走だ。この残暑の中。

熱中症で倒れなかった俺を、誰か褒めてやってほしい。

「必須登校日じゃなかったのが、せめてもの救いだな……」

顎をしたたり落ちてゆく汗を手の甲でぬぐい、俺は自分自身を慰めるようにそう呟いた。

苦々しい気分で、こうなった原因でもある“忘れ物”に目を落とす。

ぱっくり開いた鞆へ無造作に放り込んだままの、手のひらに収まるサイズのそれは、俺のお気に入り推理小説の文庫版だ。

約2年間、夢中になって続けた部活も一ヶ月前に引退し、進学はエスカレーター式なので受験勉強の必要もない。その暇つぶし用にと借りていた本である。

今日は、その本を学校の付属図書館へと返却する予定だ。

なので、別にそれほど時間に追われていたわけではないし、むしろ自主的な登校なのだから時刻など少しくらい遅れたって一向に構わないわけなのだけど。まあ、それはそれ、気持ちの問題だ。一日に本数の限られたバス。それを逃すと、どうしようもなく損をした

気分になるのは、きっと俺だけじゃないはずである。

「…あちい」

降り注ぐ、八月の終わりの直射日光。

高校生活最後の夏休みも、残すところあと5日となっていた。

ああ、神様。

そんなに俺のことが嫌いですか。

こんなことを考えるのは大袈裟かもしれないけれど、今はそれぐらい最悪の気分だった。

流れる汗は拭いても拭いきれないほどだし、こういうときに限ってハンドタオルは持ち合わせていない。

目当てのバスは乗り損ねるし、こんな田舎町では他に大した移動手段もない。

まるで自分が世界で一番不幸になった気分だ。(いや、世界には俺なんかよりもっと大変な思いをしてる人が沢山いるんだらうけどさ。アフガニスタンとかイラクとか)

暑い。

日差しがきつい。

どこか日陰に移動しなくてはと思うけど、暑さのせいで、体を動かそうという気になれない。

もう、どうにでもなればいいと、半ばやけになっていた。

「あの、大丈夫…ですか？」

そんな時だった。

“あの子”が、俺に声を掛けてくれたのは。

「え？」

ふいに掛けられた声に顔を上げ、俺はそのまま目を見開いて固ま

った。

めっちゃカワイイ。

「あのう…えっと、なんだか具合が悪そうだったので…その、いきなり声をかけてご迷惑かもと思ったんですけど…」

普段は人見知りをするおとなしいタイプなのだろう。

どもりがちで、それでも非常に丁寧な口調で一生涯懸命に言葉を紡ぐその女の子は、地元では有名なお嬢さま学校の制服に身を包んでいた。

「…すごい汗だわ」

言いながら、その子は白いハンカチを取り出した。

おそろおそろといった動作で、それを俺の額にあてがう。

俺は動けなかった。

心臓が、自分でも信じられないくらいバクバクと鳴っていて、その音が相手に聞こえないかどうか心配で心配で、気が気じゃなかった。

「あの…」

女の子が、不安げな表情で俺をのぞきこむ。

黒目がちな眼が、ふらふらと空をさまよっていた。

おい、何やってんだ、俺。

なんか言えよ。女の子が困ってるじゃねえか。

おいこら、どうしちゃまったんだ、俺。

「大丈夫です」も、「ありがとう」のひとつも言えないのかよ。

なんでもいい、何か言わなくちゃと、自分自身を責め立てる。

しかし口から発せられる声は、音にすらならない微かなもので、多分この子には届いていないだろう。

その事実がよりいっそう俺を焦らせる。

「菜々子さーん」

「あ…」

ふいに、誰かの声がした。

その声に反応して、女の子は反射的に腰を上げる。

再度、「菜々子さん」と呼ぶ声がした。どうやら親切なこの女の子は、菜々子という名前らしい。

ぐるぐると混乱する意識の隅で、俺はちらりとそんなことを考えた。

「すみません、私もう行かなくちゃ…えっと、具合の方は大丈夫ですか？」

その言葉に、俺はどうにか一度だけ頷くことが出来た。

それを確認した女の子…菜々子さんは、安心したようにホッと笑う。

（　　笑うと、もっと可愛くなるんだなあ…。）

俺の心臓が、どくと大きく跳ね上がった。

「菜々子さん？　菜々子さん、どうしたの。早くしないと置いてっちゃうわよー？」

「ごっつ、ごめんなさい、涼子さん。いま行くわ」

女の子が走り出す。

視界の中で、セーラー服の裾が揺れていた。

「…あ、ハンカチ！」

たっぷり数分は経過しただろうか。いや、もしかしたら、もうちよっと少なかったかもしれない。時間の感覚ですら麻痺していた。

手のひらの中にある白いハンカチに気づき、俺は大慌てになった。追いかけて返そうにも、もちろん先ほどの女の子の姿はもう無い。

半ば呆然としつつ、俺は無人のバス停で一人じっと佇んでいた。

「菜々子さん…って言ったよな」

そしてあの制服は、地元の有名女子高校のもの。

「これ…返さなくちゃ」

もしかしたら、これが大きな出会いの始まりかもしれない。
頬が自然とゆるんでいくのが解った。

すごく、すごく可愛い子だった。

菜々子さん。いや、菜々子ちゃん。菜々子。

平凡な名前なのに特別な響きに聞こえる。

「また…逢えるかな」

ごめんなさい神様、前言撤回いたします。

俺って、結構ツイてるのかもしれない。

手の中のハンカチを大事にそっと握りしめて、俺は立ち上がった。

神様は、まだまだ俺を見捨てちゃあいなかったらしい。

青春短し恋せよ少年！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9147c/>

青春短し恋せよ少年！

2008年8月29日19時34分発行